
真剣で幻が通る道

双六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で幻が通る道

【Nコード】

N0019Z

【作者名】

双六

【あらすじ】

川神院に一人の男がやってきた。

その男、17歳ぐらいで、全身真っ黒の格好だった。

ただ一つ、その男の瞳だけが

アメシストの宝石のように、紫色だった・・・。

超、人見知りの男が歩く、摩訶不思議の通り道。

0章 設定（前書き）

まずは、設定です。

作者は小説というものを書いたことがありません。

更新日も未定で、

オリ主がチートのよくある小説だと思います。

よろしく願います。

0章 設定

設定

・黒峰 紫貴 (くろみね しき)

男

17歳

家族

黒峰 師禅 (くろみね しぜん)

親に捨てられ、5歳の頃師禅に引き取られる

最初の格好

黒髪

髪型は後ろで束ねた髪を刃物で乱暴に切ったようなおかつぱ

黒い羽織に黒い着物

靴は黒いブーツ

まああれです、イメージは空の境界で出てくる両義式が革ジャンの

代わりに羽織を着て全身黒色な感じですよ

瞳はアメシストの宝石みたいな紫色ですよ

特徴

・破幻の瞳

ぶつちやけ刀語ででてくる見稽古の強化版

・・・チートですよ

・天性の武の才能

破幻の瞳をフルで使える身体能力、川神百代レベルですよ

・・・チートですよ

・人見知り

誰も信じてません、自分も

・戦いを行うのを嫌います

人間嫌いなのでそもそも誰かと一緒に行動したくありません

・人の言うことを聞きません

自分が認めた相手以外、最低限の事しか聞きません
自分の気分で変わります

・社会不適合者です

社会に関心があまりありません

最初は今、生きていれればいいと思っています

・家事スキル

学べば一発でできますが、面倒なのでしません

・自分を大切にしません

リストカットや自殺といった自分から体をいじめる行為はしないが
怪我をしても血を止めて終わりです

自分は居ても居なくてもいいと思ってますが、育て親の師禅が
注意していたので、今のところ死のうとは思っていません

しかし、生きたいとも思っていない

・学びたい

自分が知らない事、理解できない事を知りたいと思います
これも自分の気分しだいです

・武術家ではありません

師禅に鍛えられたが、武人とは、など

なぜ武術家とならねばならないのか理解できないし
進んで戦おうとしないので、武人と思っていない

チートがいっぱいです

作者は小説という物を今まで書いたことがないので

オリ主のスキルがチートじゃないとなにもできません(笑)

温かい目で見守って下さい

後、タイトルの

真剣で幻が通る道

特に意味は無いです

主人公が幻のような人物だなあと
フツと思いつながら付けました

更新日は決まっています

どのように物語が進むか作者もわかっていません

0章 設定（後書き）

はい、駄文ですね、
また説明を入れると思います。

1章 男と川神院（前書き）

はい、一話目です

駄文で、文才もからっきしですが

どうか温かい目で見守って下さると
ありがたいです

1章 男と川神院

・・・侍・・・

それはもう消えてしまったもの・・・

しかし侍が抱いた武士道は、力と美の象徴として今までの日本人の心に深く刻みこまれている・・・

現在、日本では武家屋敷や武道家が数多く存在する・・・

しかし・・・遙か昔、侍がいた頃と比べると現代は大きく違う事があつた・・・

それは、女子が圧倒的に強いということ・・・

これは武家娘や武道家、色々な力を持つ者が多く通う、学校生活の物語

ここは川神院、関東三山の一つで、厄除の寺院として名高くそれが市の名前になるほどだという院。そして『己を高め気力で厄を祓う』という考えのもと、武道の鍛錬を行う場所として有名である

その場所に一人の男がやってきた

その男、歳は16〜20ぐらい、髪は黒髪で髪型は後ろで束ねた髪を刃物で乱暴に切ったようなおかつぱ、黒い羽織に黒い着物、靴は何故か黒いブーツ、黒い布袋を持っていた

つまり全身真っ黒なのである

ただ一つ、瞳の色だけが違っていた・・・アメシストの宝石の如く、紫色なのである

男はそのまま、川神院に入ってしまった

門をくぐると、川神院の門弟が立っていた

「本日はどの様なご用件で？」

すると黒い着物を着た男は

「・・・川神鉄心・・・居る？」

すると門弟は目を細め・・・

「・・・失礼ですがご用件は？総代との試合を望むならばまず総代の孫にあたる川神百代殿との手合わせが決まりとなっておりですが・・・」

すると着物の男は静かに首を横に振ると布袋から一枚の手紙を取り出し

「・・・居るなら・・・これ渡して・・・」

と門弟に手紙を渡した。手紙を受け取った門弟は

「・・・少々ここでお待ちを」

そう言つて門弟は男を残して素早く室内に入つて行つた

少しの間、男は川神院の建物を眺めていると、

「・・・ああ、この雰囲気、俺には合わなそうだ・・・ん？」

ぼんやりと建物を眺めていると後ろから人の視線を感じ静かに振り返ると、

黒髪のロングヘアの女が一人、門のところまで男を見ていた。

「お？着物を着ているから女だと思つたら、男じゃないか。しかしなんだその格好？葬式の返りか？誰だお前？挑戦者か？」

男は無言で女を上から下にゆっくりと眺めると、興味を無くしたかのようにまた、前を向いてしまった

「むっ、おい無視するなー、てゆうかこっち向けー」

女はそう言つて男の肩に手を置こうとして・・・空をきる

「・・・触るな、お前に用はない、消える」

女の隣で男は女を見ずに答える

女は少しの間、茫然とした後、顔をにやけて男をみる

「つれないことをいうなよーお前なかなか強いだろ？勝負しろ！最近挑戦者が来なくて退屈だったんだ」

女は新しい玩具を見つけた子どものように笑いながら男に話しかける
「・・・消える」

男は女に冷たく言い放った

「私は川神百代、次期川神院総代だ、お前名前はなんていうんだ？」

「・・・・・・・・」

「お前はなにか武道をするのか？身のこなしが素人じゃないぞ」

「・・・・・・・・」

「お前の流派は？武器は？どの位強い？」

「・・・・・・・・」

「なーなー無視するなよーこんな美人なお姉さんがはなしかけてるんだぞー相手しろー」

「・・・・・・・・はぁ・・・ウルサイ奴だ、消えろと言っている」

男はため息を吐きながら女を見ずに答える

「やっと返事をしたと思っただらそれかー冷たい男は他の女に嫌われるぞー」

百代はふてくされているような顔をつくり、男に話かける

「・・・・・・・・じゃぁ嫌いになっただろ？・・・消えろ」

男は百代の方を向くが顔は川神院の方を見たまま答える

「他の女は、と言っただ、私は違うぞー、むしろお前に興味がある。勝負しろー」

「・・・・・・・・俺は興味がない、だから失せる」

男の返事に百代は、

「そんな冷たい事を言う奴にオシオキが必要だ・・・なっ！」

百代は男の顔面に向かっていきなりパンチを放った。だが男は、

「・・・・・・・・ひよい」

男はその場から一步も動かず、首だけを動かし飛んできたボールをよけるように百代のパンチをよける

「あはっ、これを簡単によけるか、何者だ？お前？最近の挑戦者はこれで大抵終わるのだからなあ」

「・・・・・・・・なんの真似だ？」

男は一段と機嫌が悪くなり、目を細めて百代を見る

「やっと私を見たな、そしてこの実力、期待通りだ、ますます興味

がでてきたぞ」

百代は男の強さにますます期待し、笑顔で男にはなしかける

「・・・いきなり殴りかかってくるような奴が次期総代だと？本当にここがあの話で聞いた川神鉄心が居る川神院か？」

男がぼそつと呟くと、百代は首を傾げ、

「なんだお前、ジジイにようがあるのか？・・・まあそんなことより私と勝負だ！」

百代の反応に男は呆れながらはなしかける

「人の用事をそんなことつて・・・はあ、勝負勝負つて餓鬼を相手にしてる気分になってきた」

男の返事に百代は頬を膨らませ、

「餓鬼つてなんだ餓鬼つて、こんな美人なお姉さんを捕まえて」

「捕まえてない、むしろこっちが捕まっているんだ」

「いいから勝負しろーこんな美人の相手をするのになにが不満なんだよー」

「・・・全部、第一こっちにメリットがない・・・」

男の答えに百代は首をガクツと落としたが、なにかを思いついたかのようにまた顔をにやけて、

「全部つて・・・ん？ということはお前にメリットがあるなら私と勝負するんだな？」

男は後で後悔をする、百代の強さにはない、

どうしてももう少し百代というものに考えを働かせなかったのかを・・・。

1章 男と川神院（後書き）

はい、ありきたりですね
オリ主の性格が今後の作品で
変わっていくかもしれませんが
そこはご了承ください
ではまた会いましょう

2章 男と武神（前書き）

早くもどう書いていいか
わからなくなってきた・・・

2章 男と武神

黒い男から手紙を預かった門弟は川神院総代であり川神百代の祖父にあたる、川神鉄心の部屋に向かっていた

その頃、鉄心は

「はあ、最近のモモには困ったもんじゃのう、強い者と戦いたい戦いたいと最近はそればかり言いおつてからに…最近は何が強くなつて抑えが効かんようになってきたしのう…ワシが相手になるかそれとも武道四天王に頼みを送るか、しかし最近のモモでは相手にするのモキツくなつてきたしのう」

鉄心は部屋で戦いに飢えている孫の心配をしていた、そこへ扉からノックが聞こえる

「総代、今大丈夫でしょうか？」

「ん？よいぞ、入んなさい」

扉から院の門弟が入ってくる

「どうしたのじゃ？」

すると門弟は手紙を渡し、

「今、門の入り口に全身真っ黒の格好をした着物の男が総代はいるかと、見るからに怪しかったので要件を聞くとこの手紙を渡してほしいと、名前は言つてこなかったのですがいま入り口に待たせております。」

門弟から手紙を受け取った鉄心は手紙を見て、

「はて？黒い着物の男？その様なものが知り合いにおつたかのう？」

鉄心は手紙を読み始めしばらくすると急に驚き始めた

「なんじゃと！」

急に大きな声を出した鉄心に驚いた門弟は

「ど、どういたしました！総代！？」

手紙を読んだ鉄心は慌てて

「こつこの手紙を持ってきた男の眼は！瞳は何色じゃった！今、門

に居るのじゃな!？」

鉄心の慌てように驚きながら門弟は

「はっはい!今門の入り口に、瞳は……そういえば紫色でしたね」
それを聞いた鉄心は

「早くここに……いやワシが迎える、男は門じゃ ドン!!」
!……なんじゃこの爆発音は!……この氣はモモか!?……
場所は院の入り口じゃと!まさか!？」

爆発音を聞いた鉄心は急いで門へと急いだ、

爆発音の少し前、門の入り口では、黒い着物を着て紫色の瞳を持った男と川神百代が居た

「私と戦う……メリット……金?……いや今は借金中だし……
食べ物……いや、そこまでの物は作れない……」

百代は腕を組んでぶつぶつと男と勝負をしてもらうための条件を考えていた、その頃男はというと

「……遅いな、あの門にいた奴、ちゃんと川神鉄心に手紙を届けたのか?……勝負しか言えない餓鬼みたいな女が考え込んでいるうちに早く来てくれ……面倒事になりそうだ……」

無言で鉄心の到着を待っていた

「うん……はっ!!そうか、よし!」

なにか閃いたかのように百代は男の近くに歩いていく

「よしこうしよう、いいか?これから勝負を行って負けたほうが相手に好きな願いを一ついう、相手はその願いを叶える……どうだ?」

百代が男のメリットを言うと男は、

「……はあ、まあいいか……引き分けの場合と時間制限は?」
男がけだるそうに百代に質問する

「時間は最高5分間、もしもそれ以上すぎるようならこの場が持たないからな、時間が過ぎた場合と決着がつかなかった場合は私の負けでいい!」

百代は子どものようにウキウキしながら説明を行う

「・・・本当にそれでいいのか？」

百代は

「ああつ！さあ勝負だ！今勝負だ！すぐ勝負だ！」

とても嬉しそうだ

男は

「はあ、・・・なんで俺なんかと勝負したがるんだか・・・」

すでに疲れていた

「私の武道家としての勘が言うのだ、お前は今までの会った同い年

ぐらいのどの男よりも・・・強いと！強敵だと！」

百代は今まで自分が行ってきた勝負を思い出しながら答える

「・・・知るか、お前の勘もお前の知り合いも」

まあごもつとも、である

「・・・ふう」

百代は2、3秒目を閉じ、開くとそれはさっきまでの子どものような百代から川神院の武神、川神百代になっていた

「・・・！・・・とつとと終わらせるぞ・・・」

男は百代の様子が変わったことに気がついた

「川神流、川神百代、武器は素手だ」

百代は相手にお辞儀を行い構える

「流派・・・秘密、匿名希望、武器は・・・なしでいいや」

男は軽く頭を傾けた後、だらんと構えずに立っている

「おい、なんだそれ？名乗る意味ないし構えないって・・・」

「・・・文句は勝負中だから言え、殺してもらってもかまわん、知りたい事は願いでいいな、時間がおしい」

男が言うと百代は黙り、また構えなおす

「それじゃあ・・・始め！」

そう叫ぶと百代は男めがけて強烈な突きの連打を放った！
だがしかし

「・・・」
「フッフッフッスッシャ

男は無言で百代の突きを目で追いながら避けていた

「アハハハッこれが掠りもしないか！いいぞ思った通り・・・だ！」
百代は数の攻撃を止め、速さと重さを込めた一撃を放つ

「・・・おっと！」

男は後ろに跳び、攻撃を避ける

「おいおい、今のは揚羽さんでもあたるぞ、本当に何者だ？お前？
なぜここまで動けて私に名前が届いてこない？」

「・・・」

「これが・・・次期総代か・・・そこいらの武術家とはレベルが違
うな、あの人以上だ・・・」

着地した男は考え事をしながら百代を見ていた・・・百代だ
けを

それを見逃す武神、百代ではなかった

「勝負中に考え事か！！川神流無双正拳突き！！」

「・・・！？」

とっさに百代の攻撃に気がつく男、しかし百代だけを見ていた為、
自分がどこに立っていたかまでは気がつかなかった・・・背のすぐ
後ろに門の壁があることに・・・

「！？しまっ」 ドカン！

壁を背にした男に百代は正拳突きを当てる

「ふふふ、衝撃の逃れない上での無双正拳突き、想像よりも劣った
が、四天王でもこれでおわ・・・！？」

勝ちを確信する百代・・・その時見てしまった、今まで味わった事
のない死のイメージ・・・

自分を死へと誘うであろう、紫色の瞳を・・・

2章 男と武神（後書き）

自分で読んでも下手ですね

駄文、乙です

暖かい目でおねがいしますねw

3章 男と武神 決着（前書き）

はい なんか早くもおかしくなってきました

3章 男と武神 決着

男に向けて、会心の無双正拳突きを当てた百代、勝ちを確信したがその時、見てしまった、相手の瞳を、その時感じた恐怖、自分に流れる死のイメージ、・・・殺される！

そう思った百代は無意識に動いていた、放ってしまった、・・・
・ 禁じ手を・・・

「!? ひっ！富士砕き!!!」 ドン!!!
コンクリートでできた門の壁を砕き、男は吹っ飛んでいく

・・・男は転がる、20mぐらい先を、そして動かなくなった
少して正気に戻る百代、その時気がつく、自分が何をしたのかを
・

次第に百代は段々と青ざめていく、

「わ・・・私はなにを・・・さっきの一撃で勝負はついていたのに
・・・こ・殺してしまっ・・・た？」

その場で立ち尽くす百代、そこへ鉄心が走ってきた

「なっなんじゃこれは!? どういう訳じゃモモ!!! 説明せえい!!」

そこで百代は鉄心に話す、青ざめながらゆっくりと、男に出会ってからのやり取り、決着がついてからの富士砕き、自分に感じた悪寒と・・・相手を殺してしまったかもしれないことを・・・

「と・・・とにかく彼じゃ! モモ! すぐに川神院の救護班を・・・!
?」

そこで鉄心は止まる、ありえないものを見たように

「ああ! すぐに連れて・・・? どうした? ジジイ?」

百代は鉄心が茫然としているのに気が付き、鉄心が見ている先を見て止まる、その見た先には男の死体はなかった。その変わりにいたのは

「・・・痛い、それよりも一大事だ・・・服が」

自分の体よりも百代の攻撃により、ボロボロになってしまった着物を気にしながらこちらに歩いてくる男だった

それに気が付き、喜びのあまりに男に抱きつこうと飛びつく百代
「良かった！無事だったか！」ひよい「あぶっ!?!」

男によけられ、地べたに転がる百代、男は百代を見ようとせせず、鉄心の前まであるいていく

「・・・あなたが・・・川神鉄心？」

ボロボロの男に話しかけられ正気に戻る鉄心

「あっああ、いかにも、ワシが川神院総代、川神鉄心じゃ・・・おぬしが手紙に書いてあった・・・」

自己紹介をして、話そうとする鉄心、そこで頭の中で？がでる、そして・・・

「いやいや!?そんなことよりもお主!?大丈夫なのか?体は!?!」
平然と話す男を見て、さっきの百代の話を忘れていた鉄心、自分の紹介をし、手紙の事を思い出した鉄心は男に慌てて聞く

そこへ男によけられ、納得いかない顔をしながら歩いてきた百代が話かける

「・・・普通よけるか?こんな美人のハグを?・・・まあいい、そうだお前!体は!?!」

二人の問いに男は

「・・・ああ、問題ない」

男の答えに、ほっと安心する二人、しかし

「・・・腹と背中に激しい痛みと内出血、左腕の骨が折れて、アバラ骨の数本にヒビが入ってる、そして着物が死んだ・・・ぐらいだ」
男は自分の体を確かめるように見ながら、傷の具合を告げる

「「いや!?それは問題しかない(だろ!・じゃろ!)」」
男の問いに二人合わせてつつこみをいれる

「なんで平気そうな顔してるんだ!?お前!?!」
慌てながら男に問いかける百代、男は

「・・・それよりも・・・ごほっ・・・訂正、・・・臓器も傷ん

でた・・・」

ごほつと吐血し、地面に落ちた血を見ながら男は答える、そして・

「・・・あ、まずい」

どさつと男はその場にゆっくりと倒れた

その場に倒れ、動かなくなった男を茫然と見ている二人、そして

「・・・っ！？わぁー！ジジイ！救護班！」

「・・・！？そ、そうじゃ！モモ早く彼を部屋へ！話はあとじゃ！」

二人は大慌てで動き出す、百代は男をかついで建物の中へ

鉄心は急いで救護班の所へ走って行った

男を担ぎながら走る百代、走りながら男を見て、百代は

「それにしてもこいつは本当に何者なんだ？あの様子からじゃ全然本気じゃなさそうだったし・・・それにあの時のこいつの目・・・殺されるかと思っただぞ、」

腕の中で眠っている男を見て、百代は考える

「・・・勝負は私の負け、もっと長引く予定だったのに、まあいいか、さてこいつは気がついていいるかな？あのメリットのはなし・・・これから楽しくなりそうだよ」

百代はにこやかに笑っていた

そうして百代は男を担いで、男を休ませる部屋へ走って行った

「その男はモモが部屋に連れていっている、頼んだぞ」

「はい！総代！」

救護班に指示をだし、救護班を部屋に向かわせた鉄心は男がいる部屋へと歩き出す

「彼が本当にあの手紙の通りなら、あるいはモモの渴きを癒せるかもしれないの・・・さてはて、これからどうなるのかのう？楽しくな

りそつじやわい、彼が起きたらまずは話をせんとついで
ホッホッホと鉄心は歩きながら男のもとへ歩いて行った

3章 男と武神 決着（後書き）

一体、この小説はどこに向かうのか…
それは誰にもわからない（笑）

4章 男の正体（前書き）

やっとオリ主の名前公開ですわ

主人公の名前が出てくるのが4話以降って

ありえないっすね〜

4章 男の正体

「ジジイ、説明しろよ、なんなんだこいつは？なんで私と同じ歳ぐらいである実力の男が私の耳に届かない？間違いなく四天王クラス…いや、私レベルだったぞ？」

「なんじゃいモモ、その口のきき方は、お前は次期総代としてのだな…」

「だまれジジイ、話をごまかすな」

勝負の後、救護班の治療を終え、布団で眠っている紫色の瞳を持つ男、その横で川神鉄心と川神百代は言い合いをしていた

「はあ、なぜこう育ってしまったのかのう…まあいい、この男の事はワシも詳しくは知らなかったのじゃ、しかたなかるう」

「ジジイでも知らなかったって、どういうことだ？この男はジジイに会いにきたのだろうか？」

百代が頭の上に？をだしていると、鉄心が懐から手紙を出して、百代に渡す

「ワシの知り合いの所で育っていた子でのう、その者から手紙を持ってきたのじゃ、名前は黒峰紫貴くろみねしき、詳しくはこの手紙を読んでみ、後はこやつから話を聞かんことにはのう…」

「黒峰紫貴か…手紙ねえ…」

そう言つて百代は手紙を読みだす、手紙には

『黒峰師禪くろみねしぜんより川神鉄心へ

久しいの鉄心、こんな手紙で許してほしい

お前には、言っていないが、私は病にふせておつての、自分の体のことだそう永くは生きられん、その前にどうしてもお前に頼みたい事があるのだ

私が引き取つて育てている紫貴、黒峰紫貴の事だ

私が死んだ後はこの手紙を持って川神市にある川神院、川神鉄心、私の親友にこの手紙を届け、鉄心の言うことを聞くように言い聞か

せてある

紫色の瞳をしている子だ

本当に勝手だと私も思う、しかし鉄心、もしも本当に私の事を親友だと思ってくれているのならばどうか頼む、

あの子を見守り、育ててあげてほしい

あの子には少々厄介な事があつての、今の今まで他人と接する事ができず、

自分から他を遠ざける節がある

私もあの子を引き取ってから、あの子に認めて貰うのに数年かかった……

あの子は可哀そうな子だ、人の温もりを知らん

もし一人で生きていくような事になれば、一生を孤独に終えるだろうあるいは自分で終わりにしてしまうかもしれない

あの子は自分を大切にせず、ないがしろにする癖がある

これも認めて貰った後から少しずつ直していこうと努力したが私では最後まで直してあげられなかった

話が長くなつたな、私もまとめるのが下手だな

あの子は頭がいい、良すぎるんだ

あの子は学ばせようとした事はすぐに覚えるし、自分の知らない事は知ろうとする欲もある

けれども心はまるで空だ、私では満たしてやる事ができなかった
どうか頼む、あの子を助けてあげてくれ

あの子の事だけが心残りだ

勝手だと分かっているがあの子を、紫貴を頼む
信じているぞ、親友

私は先に行く、あっちできつと見守っていると紫貴に伝えておくれ
ではさようなら、鉄心、私の唯一無二の親友よ『

手紙を読み終えた百代は布団で眠っている黒峰紫貴を見る

「……………」

彼女も理解できる所があるのだろうか

今の仲良しグループ、風間ファミリーや

義妹の一子が居なかったらと…

「…私は今の皆がいなかったら、今の私ではいられなかっただろうな…」

で？ジジイ、こいつの事はどうするんだ？」

百代は真剣な顔つきになり鉄心に問う

「むろん、親友の頼みだ…いや、そうじゃなくてもこやつはほっとけはできん

こやつの目をみたらすぐにわかった、孤独で他を信じられん目じゃ」

鉄心の答えに満足したのか、百代は肩の力を抜いた

「まあ詳しい話はこやつが起きてからじゃな」

そう言つて鉄心は部屋から出ていった

「…そういえばこいつの力のことや目のことは手紙にかかれていなかったな、ま、起きたらこいつに聞けばいいか」

百代はじいと紫貴の寝顔をみていた

「…この手紙の事はモモには時期がくるまで黙っておくとしようかの」

鉄心は懐から百代に渡したものの他にもう一枚、違う手紙をだして呟いていた

『追伸、

鉄心、もし私の頼みを聞けない事があるならこの手紙は見ずに処分しておくれ』

折り畳まされた手紙にはこう書いてあった、中には

『鉄心、ありがとう

お前には迷惑をかける

あの子を育てる上で知っていて欲しい事を書いておく、他言は無用だあの子を引き取ったのはあの子が5歳の時だ、あの子はとある村の子での

私が出会った時、あの子は瀕死だった

親はいなく、捨てられたらしい、村人からは鬼子と恐れられ、村人から暴力を受けたり、遠ざけられたりしたようだ

理由はあの子の目だ、アメシストの宝石のように綺麗な瞳だろう？

私はあの瞳に、破幻の瞳、と名付けた

どうやらこの目は一度みたものを覚え、簡単な事なら自分で真似できてしまうようだ

見る回数が増えればそれは確実になり、応用すらできるらしい

・・・おそらく、子どもでは出来ん事を出来てしまうあの子に恐怖し、

親はあの子を捨てたのだろう

村でも気味悪がれ、あの子を恐れ、鬼子、と化け物のように扱われていたようだ

おまけにあの子には天性の武の才能があった

あの子を引き取り、認められてからは、あの子を鍛えた

するとどうだ、あの子は15にして私を超えてしまった、信じられるか？

歳を取ったとは言え、若きころはお前にも対等に戦えた私をだぞ？

・・・恐らくあの子は今のお前よりも強い

私は嬉しかった、あの子がどんどん強くなっていくのが、

だが同時に恐れもあった、あの子は人を信じず、今は他を避けるだけだが

もし、他の者を敵と認識し、恨み、社会と敵対することがあるなら

あの子を止められる者がいるのか？と

今までは私がいた・・・しかしこれからは違う、私も永くはない

あの子には信じ合える友が必要だ

あの子を導いてあげて欲しい、頼んだぞ』

そう書いてあった

・・・しかし東の武神、西の武帝と言われ、若き頃はワシと同じ師のもと

切磋琢磨しワシと互角だった師禅を超えた子か・・・そうじゃモモと同じ川神学園にいれるか？あそこなら紫貴を気味悪がる奴もいないだろうし、モモの欲求不満も収まるやもしれん」
鉄心はそう考え、歩いていった

「・・・あわよくばモモとくつつかんのう、ホッホッホ」

4章 男の正体（後書き）

うん

こんな感じでもいいのかね…

いつになったら学校の話にいけないのか…

5章 紫貴と百代（前書き）

退避く退避く

キャラ崩壊おこしてるよー

5章 紫貴と百代

「……………」
現在、紫貴は状況がよく理解できていなかった

「…整理、開始…」

「体中が痛い、これはあの女の攻撃が当たったから、理解、可能」

「体中に包帯が巻いてある、あの後手当をされたのだろう、理解、可能」

「布団で俺が寝ている訳、あの後自分が気絶したから、理解、可能」
「自分の服装が変わっている、治療の為、着替えさせられたのだろう、理解、可能」

ゆっくりと状況を整理していく紫貴、そして自分の横を見る

「……………」なぜ、この女が同じ布団で眠っている？理解、不可能」

そう、百代が紫貴の布団と一緒に眠っていたのだ、しかも紫貴の腕に抱きついて

「…これは添い寝？なぜ？俺は凍傷になった訳ではない、添い寝をされる必要がない」

むしろ邪魔だ、寝ずらい」

はたから見たらとても羨ましい状況なのだが、一般男子からとてもかけ離れている紫貴、照れる、恥ずかしいといった事にはならず、ただ純粹に迷惑していた、そこへ

「お姉様～お客様起き…」

ノックもせず、赤髪のポニーテールの女の子が部屋に入ってきた

そこで紫貴と自分の姉が同じ布団で寝ているのに気がついた

「／／／／ひゃうっ！失礼しました！？／／／／」

なにを勘違いしたのか赤髪の女の子は顔を真っ赤にして大慌てで部屋から出ていった

「……………」なんだっただ？」

？マークしか出てこない紫貴、そんな中、騒ぎに気が付き百代が起

きる

「…ん？…ああ起きたか紫貴、どうだ？お姉さんの腕の中でいい夢は見られたか？この果報者め」

百代はいまだに紫貴の腕に抱きつきながらニヤニヤして話しかける

「…理解不能、これのどこに幸せを感じる要素がある、むしろ寝ずらい」

真顔で答える紫貴、照れてる素振りもない紫貴に百代は呆れた顔になる

「おいおいこんな美人のお姉さんに添い寝をされるなんて、普通は願っても叶わない事なんだぞ、紫貴は嬉しくないのか？」

「…意味がわからない、普通に叶わない事を願っていない者にするな、そもそも…まて、なぜ俺の名前を知っている？」

会話をしている紫貴は百代が自分の名を当たり前のように呼んでいる事に気がついた

「本気で言ってるぞ、こいつキャップと同じタイプか？…あぁ？名前？お前が持ってきた手紙に書いてあった」

百代の話聞いて、紫貴は川神院に来た用事を思い出した

「…手紙…そうだ川神鉄心に会わなくて、おい女、離せ」

起き上がるうとしても百代が腕を掴んでいるので起き上がれない、振りほどこうにももう片方の腕は折れていて使えない、片腕では百代を振りほどくことができなかった

「女じゃなくて私は百代だ、百代と呼べ、それにお前はボロボロなんだぞ？まだ寝てる」

どうしても腕を離さない百代、しかたがないのでそのままにいる

「…寝ずらくて寝られるか、そもそもお前が「百代」…おま「百代！…お「百代だ」…百代の攻撃でこうなったんだろ？まあ勝負を受けた以上文句はないが…とにかく腕を離せ…」

らちがあかない、そう認識した紫貴は百代を名前で呼ぶ、それに満足したのか百代は紫貴の腕を離した

腕を離されたことを確認し紫貴は体を起こした

「…そもそもお前とは「百代」…はあ、百代とは勝負をしただろう？なぜひまだに俺に関わる？」

「それは私が紫貴の事を気にいったからだ！紫貴！お前、私の舎弟になれ！！」

百代は紫貴の腕を離れた後、布団から出て立ち上がり、腕を組んでそう言った

「……………」

しーんとなる空気、珍しくポカーンとなる紫貴、そして起き上がり

「…さて、川神鉄心と話にいくか」

部屋を出ていこうと部屋の出入り口に向かって歩きだす

「おい、無視するなよ」

紫貴の襟首を掴み、ふてくされる百代

「…離せ、意味がわからない、なにが悲しくて百代の舎弟にならなくてほならない」

もがく紫貴、ボロボロの体で力がでないのか、一向に抜け出せない当然である、百代の本気の奥義と禁じ手、そこらへんの武人なら即死、武道四天王でも2〜3日は起き上がれないだろう。それをわずか半日で歩きまわっているのだ

はつきりいつて、紫貴がおかしいのである

「ハハ、もうそこまで動けるのか、本当に面白いやつだなお前は、ますます気に入った！なあシキ、私の舎弟になれよ」

せっかく手に入れた自分の癒し相手を手放さんと、がっちり掴んで離さない百代

「アハハハ…そういえばシキ、お前、勝負の時の約束、覚えているか？」

百代のその言葉にピタツと止まる紫貴、それを確認した百代は紫貴の襟首を離れた

「…約束？…ああ、メリツトのことか？」

百代の言葉を確認するため、百代のほうを向く

「ああそれだ、勝負の判定はどうなったのかわかってるか？」

百代の言葉に百代との勝負の前のやり取りを思い出し、結果を思い出して答える

「…たしか百代が言った言葉は、『時間は最高5分間、もしもそれ以上すぎるようならこの場が持たないからな、時間が過ぎた場合と決着がつかなかった場合は私の負けでいい!』…だったな、あれは俺が気絶したのが勝負を初めてから10分は過ぎていたから俺の勝ち…でいいのか?」

紫貴が確認の為、百代を見る

百代はにこやかに答えた

「ああ!あれは間違はなく私の負けだ!それにしても本当にお前は頭がいいな、私の言葉を一言一句違わずにそのままだ」

百代の態度になにか違和感を覚えながら紫貴は答える

「……なぜか俺は餓鬼の頃から記憶力はいいんだ、大抵の事は覚える…まあほとんど聞かないようにしているが…なぜ百代は負けて嬉しそうなんだ?」

そう、百代はとても嬉しそうだ、まるで悪戯が成功した子どものように…

「そこまで覚えられているのなら、メリットの事も完璧に覚えてくれるだろう?」

完璧、その言葉をやけに強調して話す百代、そして紫貴は少し下を向いて思い出す

「たしか百代の言葉は…『よしこうしよう、いいか?これから勝負を行って負けたほうが相手に好きな願いを一ついう、相手はその願いを叶える』……!?!?」

その言葉を言い終わると紫貴は真っ青になる

そう、負けたほうが、相手に願いを言う…

負けた百代が勝った紫貴に願いを言う…

たしかに自分は了承してしまった、

自分からこれでいいのか?と聞き、百代は了承した

その約束のもと、自分と百代は勝負を行ってしまったのだ

やってしまった、いくら面倒だからと適当に答えて、進めてしまった
紫貴は自分に対して呆れてしまう
その紫貴の顔を見て、百代は
最大の悪戯を成功させた子どものように
とても、にやけていた

5章 紫貴と百代（後書き）

百代さんがキャラ崩壊おこしてます…

自分の文才のなさを恨みます

自分の頭の中で考えたものと

書いたもの、

少しづつ違っていくんだよなー

6章 紫貴のその後（前書き）

百代さんがなかなかのカオスに…

見事なまでにキャラ崩壊…

百代ファンの皆様

すみませんでした…

しかしこれからこういったキャラ崩壊が続くかもしれませんが
なんせ自分、文才ないですから…

キャラの個性がなくなるかもしれないかもしれませんが

そこはご了承ください…

6章 紫貴のその後

「……………」

「……………」

「……………」

ここは川神院、川神鉄心の部屋、現在部屋には、川神院総代、川神鉄心

その川神鉄心に手紙を届けにきた紫色の瞳を持つ青年、黒峰紫貴そして、武神といわれ次期川神院総代と言われている、川神百代

・・・現在、紫貴の腕にしがみついて、ご機嫌である

「…これはどういう事じゃ？」

現在の状況にまったくついていけない鉄心

当然である、黒峰紫貴が起きたと聞き、

部屋に百代と二人で来るよう指示をだし、そして二人が部屋に入ってきた

これまではいい

鉄心がわからないのはその後だ

心なしか疲れた顔をしている紫貴

これもまあわかる、あの百代と戦った後なのだから

おかしいのはその百代だ

あの風間ファミリー以外の男には、関心がまったくなかつた百代が今日初めて出会った紫貴の腕にしがみつき、一向に離そうとしないのだ

おまけにかなりの上機嫌なのである

「…紫貴君、モモはなぜ、紫貴君の腕にしがみついているのじゃ？」

鉄心はとりあえず、百代にしがみつかれながらも、気にする素振りをせず

黙って立っている紫貴に問いかけてみる

「……………知らん、本人に聞いてくれ、俺もよく理解できていない……………」

「いつか、出来ればコレを外してくれ・・・」

横目で百代を見て、コレ扱いをする紫貴

「…モモ、なぜ、紫貴君にしがみついているのじゃ？」

鉄心はとりあえず、紫貴の腕にしがみついている自分の孫娘に質問を行う

「シキは私の弟になったのだ！だからこれは姉弟のスキンシップだ

」

「……………」

ますます状況が読めない鉄心、頭の上の大きな？を出している

「…どうやら俺は先ほどの勝負の結果、百代の舎弟…になったようだ」

話が進まないと判断した紫貴は、鉄心にそう告げる

そう、それは紫貴が目覚めた後、百代とのやり取りの結果、そうだったらしい

少し時間が戻る

「という訳で勝負に負けた私の願いを、勝ったシキが叶えなくてはならない」

百代が紫貴にそう言っている

「……………はあ、納得いかないが、自分で了承してしまった事だしな…で？俺は何をすればいい？川神百代」

紫貴はなにかを諦めたように百代に返事を返す

すると百代はまた笑顔になり

「だ〜か〜ら〜シキ、お前は私の舎弟になるんだ！」

百代は自分の胸の前で腕を組み、そう答えた

「…舎弟【シヤテイ】、意味はたしか自分の弟。実の弟。また、弟分。他人の弟。…つまり黒峰紫貴が川神百代の弟…義弟【ギテイ】になり、川神百代と姉弟【シテイ】になる…で、いいのか？」

紫貴はまるで辞書を読んでいるように確認をとる

「ああ！まあそういう感じだ、少し固いがまあいいだろう、今、ここからお前は私の二人目の弟だ！」

百代の言葉に紫貴は違和感を覚える

「…二人目？おい姉・百代、お前には他に弟がいるのか？」

紫貴の問いに百代は

「うーん、固いなあ、ほらシキ、姉さんとかお姉ちゃんとか姉上とかモモ姉とか言ってみろ」

紫貴の質問に答えず、百代はワクワクしながら紫貴に呼んでほしい自分の名を紫貴に喋りだす

「……質問に答える、愚姉【グシ】百代」

「いや！それはないだろ！？スマン！それだけはヤメロ、頼むから」

「……………」

「…シキ？」

「…」

「怒ったの…か？」

「…」

「……………あ！そうか弟のことだな、ああ！シキの他にもう一人だけ舎弟がいる、大和だ」

「…大和？」

「ああ、直江大和、シキと同じ歳で頭が切れる、ファミリーでは軍師を名乗っている」

「…ファミリー？百代の家族のことか？」

「…最終的に百代になってるし…「愚姉？」ああ！？スマン！ファミリーだな、いや違う、家族のようなものだが、風間ファミリー、私の仲間だ」

自分の弟になったものにいきなり嫌われないよう、慌てながら答える百代

「…そうだ、今度シキにも紹介するぞ風間ファミリー、舎弟の大和や皆にもシキを紹介しなきゃなあ！あそこに入ればシキも少しは人付

き合いも…」

「必要ない」

「…なんでだ？」

百代のファミリーや大和を紹介するという提案をスッパリと切る紫貴

「百代の舎弟にはなつたが他の舎弟と関わるのは別の話だ、他の人間と基本関わる気はない…さてそろそろ俺は川神鉄心に会って話をしてくる」

そう言つて紫貴は今度こそ部屋を出て行つた

部屋に残された百代

「…まあいいさ、シキが私の弟になつただけで、まっ！あいつらがシキをほつとく訳がないしな」

そう言つて百代は紫貴を追いかけて部屋を出て行つた

その後、紫貴の腕に百代がしがみつき、

紫貴が抵抗するが、百代は姉弟はこういうものだ と

紫貴の抵抗も空しく、現在にいたる訳だ

「舎弟…モモ、それはあの直江と同じ…と取つてよいのかのう？」

「ああ、大和と同じ私の義弟だ」

とても嬉しそうに話す百代、本当に紫貴が弟になつた事が嬉しいようだ

ふむ…出会つて半日であのモモが舎弟にするほどの気に入りよう

…ひよつとして本当にモモにも春が来たか？だとすればめでたいな

「川神鉄心」

「ホ！？」

孫娘の将来の事を考えていた鉄心、そこへ紫貴から声をかけられ素
つ頓狂な声を出す鉄心

「…とりあえず、始めまして、俺が黒峰紫貴、黒峰師禅の遺言でここに来た」

とりあえず自己紹介を行う紫貴

「…あ、ああ、始めまして、紫貴君、ワシが川神院、総代、川神鉄心じゃ」

鉄心も紫貴の後に自己紹介を行う

「そして私が次期…それで…」ってシキ!? それはないだ」「愚姉?」…なんでもないです」

紫貴に素っ気ない態度をとられ、部屋の隅でいじける百代、

百代があしらわれている事に茫然とする鉄心

そしてそれらを無視して話を続ける紫貴

「それで川神鉄心、話の前に確認したいことがあるのだが…」

紫貴の言葉に百代から意識を紫貴に戻す鉄心

「確認? なんじゃ?」

「それは…」

鉄心に話を始める紫貴、それはこれからの自分に必要な事のようにだ

6章 紫貴のその後（後書き）

ごめんなさい・・・

その言葉が作者の頭に流れました…

自分で読み返して

百代を見て

誰だ？コイツ？

そう思いました

前書きでも書きましたが

百代ファンの皆様

本当に申し訳ありません

7章 武神と武神 刹那の戦い(前書き)

やばい…

やっちゃった感が半端ないッス

7章 武神と武神 刹那の戦い

日は落ち、時間は夜に変わっていた
川神院道場、そこは川神流を学ぶ川神院の門下生たちが普段、汗水を流し

己を高めようと技を磨き、心身を鍛える場である。

普段ならば大勢の門下生がおり、門下生同士で切磋琢磨し合い、賑やかなこの場に、

今は4人の人間しか居なかった

川神鉄心、川神百代、黒峰紫貴、そして…

「いきなり、道場を使うために人払いを行うとはどういうことネ、師範？オマケにワタシまで残れなんていうカラ、他の門下生が不安に思ってたヨ？そしてその子は？」

川神院拳法師範代、ルーイー師範代である

「まあ落ち着けルー、彼は黒峰紫貴君といつての、黒峰師禅の…まあ孫のようなものじゃ」

鉄心がルーに紫貴の説明を行う

「黒峰師禅？あのワタシがまだ幼く、一門下生だった時にここによくきていた師範と互角だった、武帝、黒峰師禅ですかネ？」

あの人は強かった…師範と同じ師を持つだけはあるヨ

あの人は川神流ではなく、己の流派だったが…

あの人は学ぶ事が沢山あったネ、

…あれ？しかシ？あの人には配偶者がいなかったはず？どういう事ネ？」

ルーは昔の事を思い出して鉄心に聞く

「そうじゃその師禅じゃ、…まあ紫貴君は養子でのう」

鉄心がルーに説明をおこなう、そんな中、

「おいジジイ、そんなことより早く勝負を始めるぞ！」

胴着を着た百代が鉄心に向かって叫ぶ

「なんじゃモモ、その口のきき方は…あれほど言っておるのにお前という奴は…」

「うるさいジジイ、ならお前もモモと気安く言っなよ」

百代と鉄心の口論が始まる

「ちよつと待つネ！？まさか師範と百代が今、戦う気ですかネ？ここが持たないヨ？」

二人の口論を止め、問いたただす

「あだからルーをここに残したのじゃ、時間も10秒でルーに結界と技が外に飛んだら止めてもらうためにのう、彼にワシと百代の実力を見せる事になつてのう」

鉄心がルーに仕事の説明をする

「ああ、ワタシが残された理由、ワカツタヨ」

ルーがガツクシと落ち込み、紫貴の前に移動する

「始めまして、紫貴君…だったネ？ワタシは川神院師範代、ルーイだよ、よろしくネ」

そういつてルーが紫貴に握手を求め、右手を差し出す、しかし…

「……黒峰…紫貴…だ」

紫貴はそれだけいうと道場の隅に歩いて行ってしまった
ルーは苦笑いをしながら差し出されたままの右手を見る

「…すまんのルー、あの子は少し複雑でのう」

鉄心がルーの隣へ移動する

「そうですか…いきなり嫌われたかと思つたヨ…しかし…」

ルーは真剣な顔になり

「彼は何者ネ？少しだけ、魔の匂いがするヨ、少しだけネ」

「ふむ、流石ルーだの、気がついたか…彼の幼少時代に問題があつての、それが原因じゃ…彼が人との間に壁を作るのも、おそらくはそれが原因じゃの」

「フム、あれは治すのに時間がかかりそうネ、しかもかなり難しいヨ」

「ああ、わかつておる、その事も理由で今回、ワシとモモの勝負を

見せる事になったのじゃ、まあ詳しい話は後で二人きりの時に話す
でな」

鉄心とルーは他の二人に聞こえないよう、小さい声で話す

「では始めるとするかの、モモやるぞい」

鉄心の声で百代が道場の隅にいる紫貴に一方的にベタベタするのを
止め、鉄心のもとへ近づいてくる

「やっと話が終わったか、さっさと始めるぞ、ジジイ、すぐにくた
ばるなよ?」

悪態をつく百代に鉄心が

「…舐めるなよ小娘が…まだまだお前に負けてやる気はないわ!」

鉄心の氣が高まり、それに気がついた百代も楽しそうに顔を笑わせる

「ハイハイ、そこまでネ!ではワタシが審判をさせてもらうヨ、

制限時間は10秒、本来ならワタシ一人では無理だが今回は他に人
が居ないからいいネ、それ以上はワタシが持たない、では二人とも
準備はいいネ?」

「うむ」「ああ!」

「それでは尋常に…はじめ!」

合図と同時にルーの結界の中で二人の武神がぶつかり合う

いまさらだが、なぜ二人が戦うかというと、理由は少し前、百代と

紫貴が鉄心の部屋に来て、それぞれの自己紹介が終わった後まで戻る

「頼みたいこと?なんじゃ?」

鉄心にむかって紫貴がそう言いかける

「…俺は師禅から川神院の事…川神鉄心のことをよく聞かせていた、
だから遺言通りここにきた…」

紫貴がボソボソと話始めた

「…師禅からは俺の今後を…川神鉄心の指示に従えと言われた…が、

俺は俺が認めた、人間の指示にしか従う気は…ない」

師貴の言葉に鉄心は眉を細めた

「…ん？まてよ…それは私の事をシキが認めたということだよな？」
百代がとても嬉しそうに、その場で踊りそうな雰囲気です。紫貴に話かける

「……………」

「…あれ？な…なぜ…そこで黙る？」

紫貴が黙ってしまったので、動揺する百代

「それはつまり…ワシがお主にとって信用できる人間かどうか…というよりも、お主に指示を出したければ、お主を認めさせる…というところか？」

鉄心がそういうと場の空気が一段、重くなる

「…ああ、そう言う事だ…俺の考え方が気に入らなければ…今の場で追い出してもらってもかまわん」

紫貴がそう言うのと今度は百代が黙っていない

「！？ 待て！紫貴！…それは私が許さんぞ！ジジイ！！」

百代が鉄心に向かって叫ぶ

「…なぜ、百代が…怒る？」

百代が自分の事で祖父に食って掛かるのか理解できない紫貴

「お前は私の弟になったんだ、当然だろう？紫貴の事は気に入っているし、手放す気はないぞ」

百代は当然だろう？と胸の前で腕を組んで、紫貴に言う

「…理解不能だ…さっきあったばかりだろう？」

紫貴は百代の言葉でますます混乱し、百代に問う

「時間なんて関係ない、姉が弟を心配する、それが姉弟だろうが」
なにを言っているんだ？と言わんばかりの百代

「…俺のことを全然知らないのに、なぜ俺を信用できる？」

百代の言葉に動揺し始める紫貴、百代は

「時間なんて関係ない、私の勘だ、それにこれからシキを知っていけばいい、時間もたっぷりとある」

「…姉弟、俺は…姉を持ったことがない…」
「私が教える」

「…他の姉弟や…ましては他の家族すら見たことがないんだぞ？」
「かまわん！それも私が教えてやる！」

「俺は…化け物…だ」

「それがどうした？私も不良からよく言われる」

「……………」
「それにお前は化け物なんかじゃない…人よりも優れる、私の弟だ」
「……………」

「お前を…私の弟であるシキを化け物なんていう奴は…これからは姉である私がぶっ飛ばしてやる、言葉通りにな」

反論する言葉がなくなった紫貴に、どうだ！！といわんばかりに笑顔を向ける百代

「……………ありがとう…ねえさん」

ぼそつと呟く紫貴

「…！？シキ！？いま…」

「ありがとう、と言ったんだ愚姉、こんな姉では今後は疲れそうだ

……………」

はあ…とため息をつく紫貴

「愚姉はやめろ！シキ！ほらお姉ちゃんと言え！」

「愚姉で十分だ」

「わかつたから、なんでもいいから愚姉だけはやめてくれ」

二人のやり取りは知らない人が見れば間違いない姉弟に見えるだろう

そして二人において行かれていた鉄心

「…ワシ、泣いちゃいそうだわい」

座り込んでいじけていた

「…気持ち悪い…」やめろ、ジジイ」

二人で鉄心に言う

「息ぴつたりだのう！？」

立ち上がる鉄心

「五月蠅い！ジジイ！…それよりもシキを追い出すのは私が許さんぞ」

話が戻った…

「勘違いするでない、そんな事最初から考えておらんわ、それにしても、よっぽど紫貴君が気に入ったようだのうもも、結婚するか？構わんぞ？別に…」

「／／／／ジ…ジジイ！？ポケたのか！なにふざけた事言ってる！／／／／」

ひゅん！と鉄心の所に飛んでいき殴りかかる百代

「凶星か！祖父の向かってなにをする！！」

百代の攻撃をガードし、反撃する

「黙れジジイ！黙らしてやる！」

「やってみる小娘！」

乱闘を始める二人、余波で部屋がめちゃくちゃになっっていく

その二人を見て紫貴は…

「……うん、それだ」

ピタッ！と止まる二人…

「…は？」

「…ん？」

なぜ、乱闘が止まったのか、理解できない紫貴

「シ…シキ…今、なんと？」

オドオドしながら聞く百代

「…ん？…うん、それだ…と」「…！？」

なにを言っている？と、きよんとする紫貴

「／／／／！？な、なななにをいつているんだ！？シキ！？まだ私たちは出会ったばかりで…いや、たしかに時間なんて関係ないとはいったが…あ、あああれは姉弟の話であってだな…いや、別にシキが嫌だというわけでは…／／／／」

顔を真っ赤にして混乱する百代

「そ…そうじゃぞ！紫貴君！そういうのは簡単に決めるのは…他に

もしい人が沢山おるわけだし…」

百代と同じようにあたふたする鉄心

「なんだそれは！ジジイ！！お前が言ったんだろっが！」

「黙れ！小娘、お前も否定しただろっが！」

また、乱闘を始める二人

「べ…別に嫌というわけでは…それに姉としても、そこらへんの奴に大切な弟をあげられるか！シキは私のものだ！」

「アホか！どちらも百年早いわ！第一紫貴君は17歳…」

「なんだとジジイ！別にお互い卒業すれば…」

そこでまたピタツと止まる二人、

「そっういえばシキ、高校には行っているのか？」

急に質問される紫貴

「いや…行っていない、というか、学校に行つた事がない…それよ
り…」

辺りを見る紫貴、つられて二人も辺りを見る

「…いいのか？部屋…めちやくちやになつたぞ？」

紫貴の言うとおり、部屋はめちやくちやだ、とても人がいられる環境ではない

「…No！」

ムンクの叫びのような鉄心

「あーあ、さて、行くかシキ」

紫貴を連れて部屋から出て行くこととする百代

しかし…

「まてい、二人とも」

二人の襟首を掴む鉄心

「離せ！ジジイ！」

「だまれ、モモ！お前にも責任があるだろっ！」

「……なんで俺まで？」

納得のいかない紫貴

二人は…

「（お前・お主）が原因だろうが！！！！」
「？・・・？・・・？」

まったくわからない紫貴であった・・・

7章 武神と武神 刹那の戦い（後書き）

…あれ？

作者の中のオリ主像が

大きな音で崩れていきました…

…これ、もう人見知りじゃなくなかね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0019z/>

真剣で幻が通る道

2011年12月5日14時54分発行